令和3年3月11日

関西中央高等学校
令和2(2020)年度　学校評価報告書

関西中央高等学校
学校評価委員会

1　本校の概要

(1)沿革

昭和39(1964)年4月に、桜井女子高等学校として現在の地(奈良県桜井市桜井502番地)に開校し、57年を迎えた。平成11(1999)年4月に、関西中央高等学校に校名変更を行い、特進コースを男女共学(平成15(2003)年全コースで共学)とした。開校以来、課程、コース等の変遷を経て、平成29(2017)年4月より、普通科特別進学コース・進学コースの2コースとなった。

(2)基本理念、基本方針

基本理念　　建学の精神「徳をのばす、知をみがく、美をつくる」に基づく人格形成
基本方針　　「学ぶ力」をのばし、「生きる力」をみがく

2　今年度の重点目標における取組計画、自己評価、改善方策

自己評価の目安　　S:大幅達成　A:達成　B:未達成　C:大幅未達成

(1)　重点目標①　授業改善と生徒の学力向上のための取組の充実

取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
教育・重点目標達成に向けた組織的な授業改善の仕組みを構築する。	A	本校の教育目標・重点目標を授業改善の視点から具体化したテーマを設定し、授業改善の重点および、取組内容の確認を行い、定期的に研究授業や教科会議にて検証を実施している。教科主任と教務部長は緊密に連携し、改善を進めている。	授業力向上を目的とする「授業見学」を継続的に実施。現在は 2022 年の新学習指導要領に向けて、本校独自の教育を行なえるように、教育課程、教育内容を改善し、同時にICT委員会を立ち上げ、ICTを取り入れたカリキュラムも併行して検討し、学園全体のサポートを受けながら学習環境の構築をめざす。コロナ禍において学習環境も大きく変化していくことから変化に対応できる仕組みの構築を行なう。
指導体制の工夫、改善を行なう。きめ細かな指導の効果的な実施や、学力の定着を図る確認テスト・補習体制、全教職員による学習規律の徹底を行なう。	A	全職員による共通理解・共通対応を行い、学習内容の定着に向けた実践を行なった。学力向上には授業改善が必要なことから、併設校である畿央大学と連携を取り、授業改善に向けた校内研修の実施を行なった。併せて、家庭学習の充実に向けたICT上での管理・指導の徹底を行なった。	

(2)　重点目標②　「創設のこころ」を礎として、豊かな人間性を養い、本校生としての自覚と誇りを持たせる。

取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
学べる学習環境と共に学ぶ仲間に対して感謝の気持ちを持って日常生活を送ることで豊かな人間性を養い、本校生としての自覚を持たせる指導を行なう。校門一礼を通して感謝の気持ちを表し教員も校門前で挨拶を積極的に行ない、指導を行なう。	A	継続的に「創設のこころ」の唱和を行ない、「徳をのばす」を持って行動することを心がけ、授業において「知をみがく」こと、周囲に喜びと感動を与えられる「美をつくる」ことの本質を理解させている。朝の登校時には、多くの教員が校門前に立ち、生徒の様子を確認しながら挨拶を積極的に行い、校門一礼の指導を行なっている。	教職員においても「創設のこころ」の理解を深め、日常生活の中での実践ができるよう研修を実施し生徒だけではなく教職員も自覚と誇りを持って指導し模範をめざす。

（3） 重点目標③ 生徒一人ひとりの希望進路を保障

取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
進路情報の提供をタイムリーに行なうため、担任との面談回数を増やし定期的に実施。行きたい進学先を目指し、基礎学力の定着を図るため、放課後学習の仕組みを変え実施した。また、対面以外にもWEBを利用した進路説明会や学校説明会の案内を行なう。	B	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本校においても休業期間があり、また、進学先においても説明会が中止になっているが、WEBの進路説明会や学校説明会の案内を行い参加を促している。担任による面談も開始し進路指導部と連携を取り一人ひとりにあった進路情報を提供している。進路通信を発行し、情報の提供についても行なっている。学年通信では、放課後学習の取組情報の提供も行い、積極的参加を促している。	進路指導時には、将来のことを考え、何を学べるのか伝え一人ひとりにあった進路指導を3年間を通して担任と進路指導部が連携できる体制の構築をめざす。保護者・生徒アンケートで要望があった内容を進路説明会や進路指導にも反映し信頼のおける進路指導を行う。また、コロナ禍において進路選択で差がでないように留意し最新情報や情報集約の方法についても提供を行なう。

（4） 重点目標④ 自分らしさを発揮し、自尊感情を高め、互いに認め合い支えあいながら共に生きていく社会を実現させる力を育成

取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
自他を尊重する人権感覚を高めるためには、最初に、自分を尊重する、自分を大切にするという自尊感情を高めることが大切である。人権教育を取り組むことにより、自他を尊重し合える人間関係を築き、心豊かな生徒の育成を図る。	B	「命の大切さを考える」をテーマとした人権教育講演会を実施し、その後、各HRにて講演の振り返りを行なった。また、コロナ禍の中で差別が起きている仕組みの理解をさせ、高校生活でいかに自分らしく生き、他人との心の距離は離さず日常を送れるかを考えさせる機会を設定した。	人権や命の大切さについての意識を身につけ他者への思いやりの気持ちを養い、一方的な講義ではなく振り返りなどを含めた研修体制の構築をめざし、理解を深める。

（5） 重点目標⑤ 感染症について正しい知識を習得させ予防に努める態度の養成

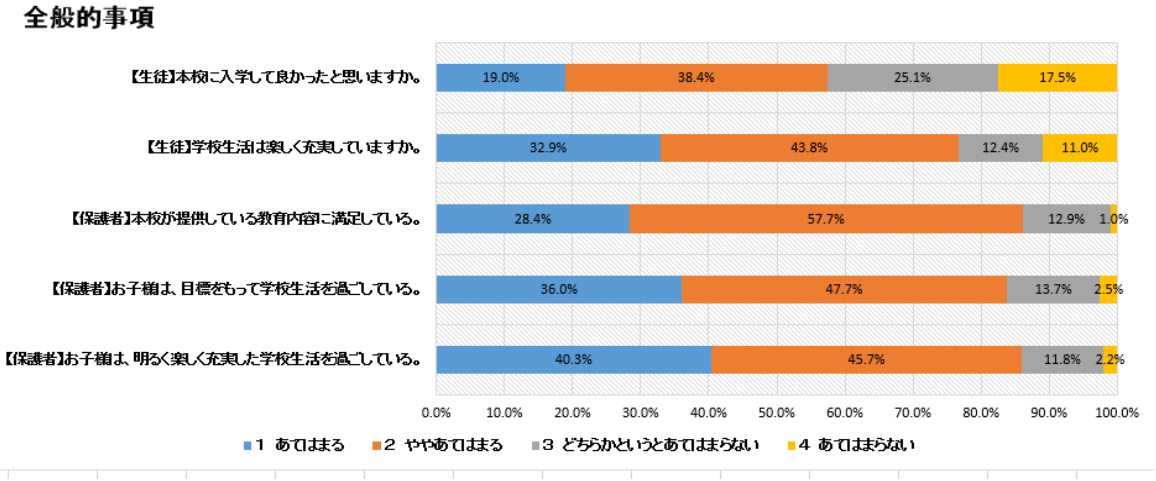
取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
文部科学省の「学校の新しい生活様式」にもとづき、本校のガイドラインを作成。教職員に周知したうえで、新型コロナウイルスに関する正しい知識の指導を行なう。	A	マスク、手洗い、換気、3密にならないよう指導し、HPでも保護者に協力を依頼した。生徒には毎朝、健康チェック表を提示させ、体温管理による健康管理を行なった。また、部活動においても、ガイドラインを決め、換気・消毒・手洗いの徹底を行ない、校外試合等の遠征時にも記録・検温の徹底を行なった。感染症拡大の状況を判断し、休業・分散登校・時差登校を実施し、消毒液の手配や行事の実行判断を適時行い、安心して学校に通える体制を構築した。	教職員および生徒にも正しい知識の提供や健康管理を継続的に行なう。感染症に対する差別については人権教育部と連携し感染症に対する認識を深めることをめざす。また、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐ為に、消毒液や手洗い場の設置等、ハード面の充実を行い、生徒・保護者にも安心して通える体制を維持する。

3　アンケートの実施状況について

学校評価委員会において、例年行なっている保護者アンケートに加え、保護者アンケートと関連性を持たせた内容で生徒アンケートを実施している。保護者アンケートは、令和2年7月に実施し、生徒アンケートは同10月に実施した。双方の結果を対照させた簡単な分析を以下に示す。

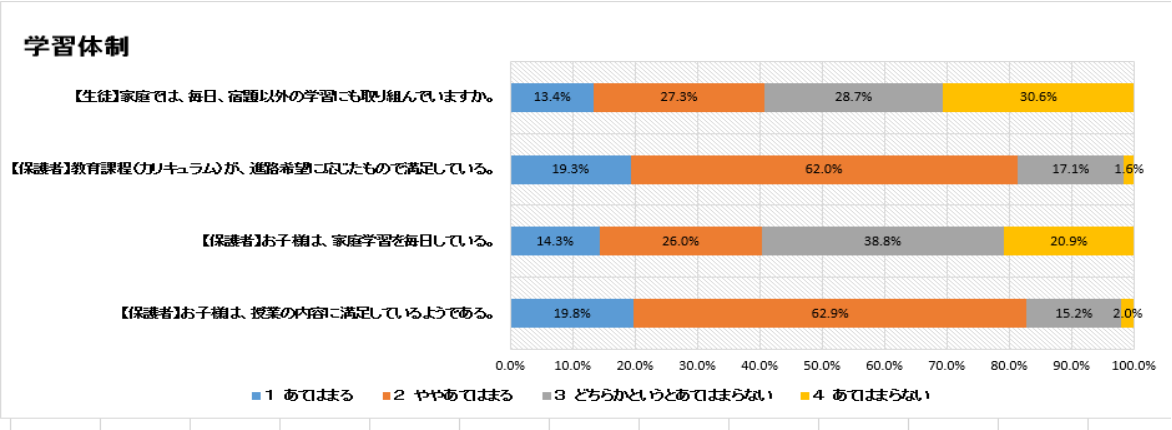
（1）全般的事項

生徒の約7割は本校の学校生活を充実感を持って過ごしており、9割弱の保護者も生徒の充実感を共有している。また、9割強の保護者は、本校の教育内容に満足しており、昨年度よりも数ポイントではあるが上がっている。休業期間がある中で昨年同様の保護者評価を得ている理由としては、朝学・確認テストの取組の満足度（95%弱）や休業期間中の課題の取組評価（9割弱が課題を実施したとの認識）と推察される。ただ、充実感を持てていない生徒や満足されていない保護者が一定数いること、また、休業期間の対応についての要望もあることから学年・教科と横断的に協議し改善努力が求められると考える。



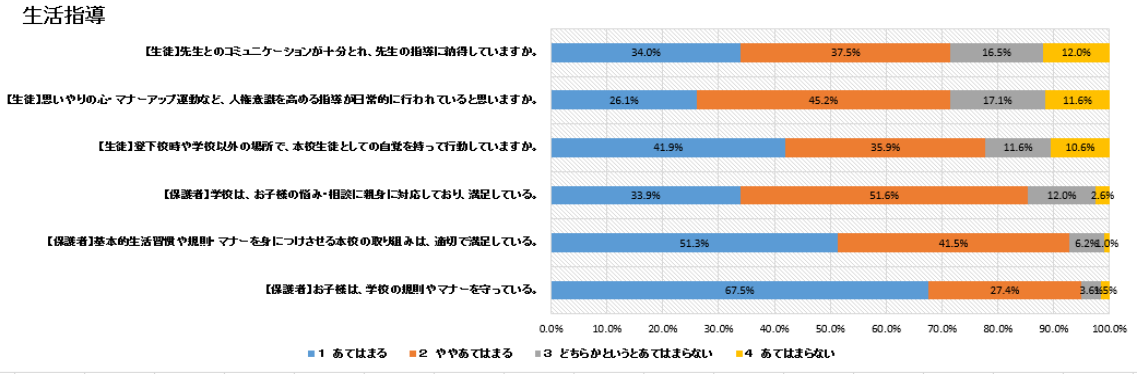
（2）学習体制

保護者の約8割は生徒が授業内容に満足していると感じている。毎日の家庭学習に関し、毎日取り組んでいると感じている割合が、生徒、保護者ともに若干ではあるが向上している。休業期間中には、教員から課題進捗情報をe―ラーニング上や電話にて確認していることも向上した要因であると推察される。1学期に実施できなかった、放課後の取り組みの充実・拡大させ、部活動等課外活動とのバランスを自律的に取れるように指導する等、学ぶ力を伸ばすことへの対応をさらに進める。



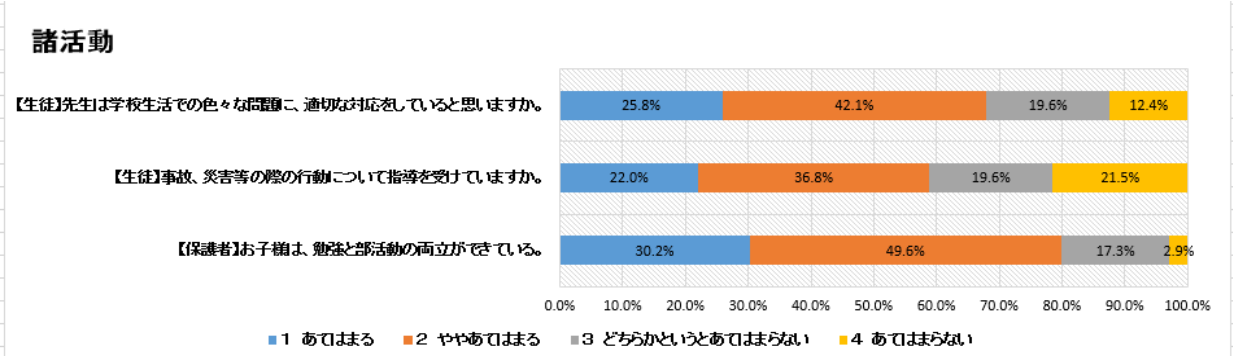
（3）生活指導

生徒の約7割は、教員との良い関係性が保たれており、指導に納得している評価をしている。一方的な指導ではなく、本質を理解させ本人が納得するまで指導をしている結果であると推察される。学校の規則やマナーは家庭ではできているが学校での指導はできていない評価になっているが、本来、保護者が家庭内で規則やマナーを守ることを教育する立場であることの認識が薄れてきている。また、学校の清掃が行き届いていないとの意見についても、校内の清掃は生徒が行なっており、自分の子どもが掃除できていないとの評価になっていることを認識する必要があり、保護者意識の改革も必要である。ただ、教員とコミュニケーションが取れていないと感じている生徒や指導に納得していない生徒もいることから、個別対応を重ねることで改善していく努力が必要である。



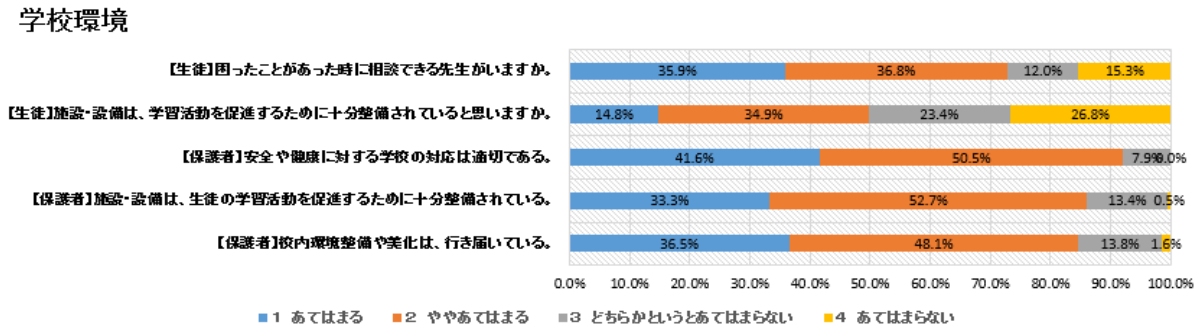
（4）諸活動

教員の対応については、昨年度に比べ評価はあがっているが、全体の満足度から比較しても低い部類である。個々の指導については納得できているが、客観的な全体の対応に関しての評価は厳しいことから、生徒が納得できる対応をそれぞれの教職員が意識し、かつ、同じ方向を向いて指導ができるよう努力する必要がある。また、災害訓練については、今年度実施できておらず、訓練以外で理解をしてもらう指導の必要性が見て取れる。昨年度から部活動の方針を全学的に定め運用して、勉強と部活動が両立できるよう工夫はしているが、1学期は部活動自体が出来ていない為、継続して両立できるように担任、顧問を連携し対応していくこととする。



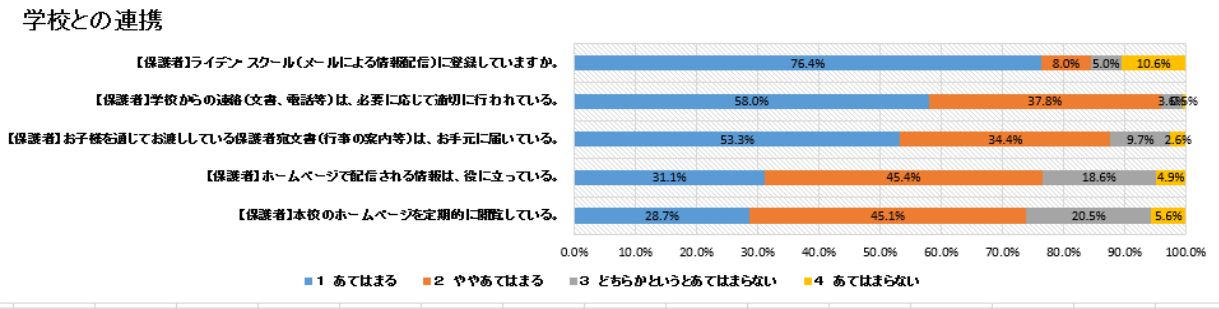
（5）学校環境

生徒の困った時に相談する教員がいないという割合は昨年より改善した。しかし引き続き教員の相談対応に対する意識の向上の必要性は感じる。また本校の学習活動のための施設に関して保護者の評価と生徒の評価が乖離している。昨年よりタブレットPCの台数を増やしたり、システムを試験的に導入をしているが、休業期間中のオンライン授業を増やして欲しいとの要望が多かったことからこの結果になったと推察される。



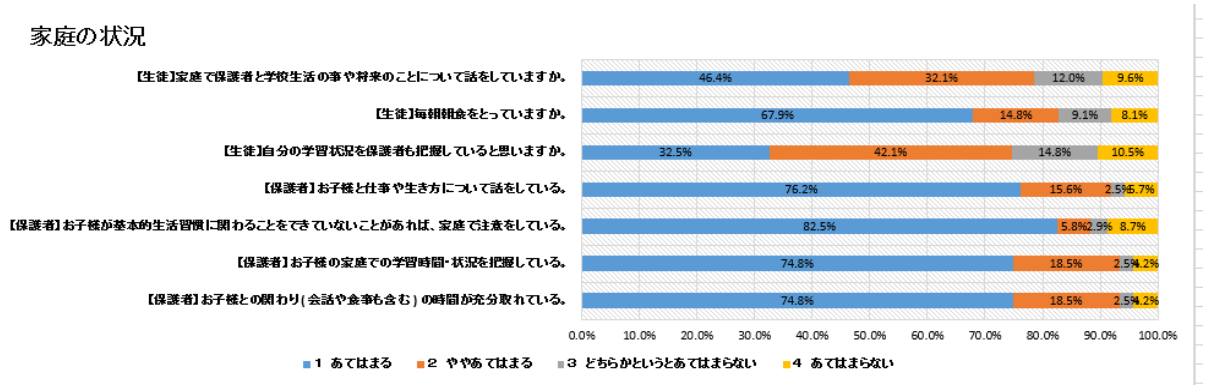
（6）学校との連携

学校からの連絡（文書・電話等）については、昨年度から大幅に改善されている。休業期間中は、郵送・e―ラーニングでの課題提出で比較的に電話やシステム上の連絡が多かったのが結果に反映されていると推察される。逆に休業期間中にHP上に情報を掲載して欲しいとの要望が多かったことから、昨年より評価が低くなっており、活用方法も含め検討していくこととする。



（7）家庭の状況

昨年よりも家庭で休業期間中に学校生活や将来のことについての会話が増えてるいる。休業期間中に家にいる時間が増えたのが要因と推察される。放課後学習の様子やe―ラーニングの学習時間数など、学校内での学習状況を面談等で保護者に情報を提供することにより、「生徒自身の学習状況を保護者が把握していると思いますか」の項目について改善したいと考える。



（8）全体として

新型コロナウイルス感染症の影響により、生活様式が大きく変わり、学校・生徒・保護者の関係性も大きく変わってきている。本格的に授業が開始されてからのアンケートであるが、昨年よりもポイントが高くなっているものがあるが、進路情報提供や新しい放課後学習については大きくさげていることから、一人ひとりにとことん寄り添い、学年・教科と横断的に情報共有を行ない対策を行なう。アンケートの意見についても学年・教科に共有し分析・対策をし継続的にモニタリングしながら学校運営を改善していく。今後の報告書は経年経過が分かるような仕組みに変更しコロナ禍においてどのように生徒・保護者の意識が変わっていくかを観察し、常に注視しながら学校運営を行なう。また、否定的な意見も少なからずあることから、学校全体として解決する為に方向性を考え対応していくこととする。

4　学校関係者評価委員会からの評価結果について

令和2年12月9日に学校関係者評価委員会が開催され、下記の審議等がされた。

資料に基づき、文部科学省のガイドラインに沿った「学校評価」について説明がされ、本校の学校評価委員会において決定された「学校評価」の進め方について説明がなされた。その「学校評価」に「学校関係者評価委員会」が関与する趣旨、関与方法について説明がされ、出席委員全員で共有された。
西川校長より、資料4に基づき、現在の本校の取組みに関し、具体的に説明された。その上で、事務局より、資料6,7に基づき、今年度の5項目の重点目標とその目標を設定した方法等が説明され、項目ごとの取組計画、取組状況、自己評価・達成状況及び、今後の改善方法について説明され、合わせて保護者・生徒アンケートの集計結果が説明された。その上で評価に関し、意見交換が行なわれた。

・新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、高校が休業となった。6月中旬から分散登校が始まったが、3年生の進路選択の幅が減ったと考えている。早い段階で進路を決めていた生徒は良かったと思うが、決められなかった生徒もいる。生徒からは進路指導が頼りないとの意見も聞き、生徒自身で調べさせるのではなく、将来のことを考えて、何を学べるかを教えて欲しい。重点目標にある3年間を通しての進路指導をしっかりと行なって欲しい。

・休業期間中の学習については、スタディサプリ（イーラーニング）が導入できていたこともあり、スムーズにできていたと思う。

・感染症予防の対策として、消毒液の手配がしっかりされており、安心して学校に通わすことができた。

・文化祭・体育祭の中止の決断については、周囲から評価されている。

・コロナ禍での対応を見ると、私立高校に通って良かったと評価できる。これから、デジタル化が進んでいく。

・コロナ禍にあり、日本の進路も変わっていくので、新しい仕組みを考えて欲しい。

・学校の規則やマナーは家庭ではできているが学校での指導はできていない評価になっているが、本来、保護者が家庭内で規則やマナーを守ることを教育する立場であることの認識が薄れてきている。また、学校の清掃が行き届いていないとの意見についても、校内の清掃は生徒が行なっており、自分の子どもが掃除できていないとの評価になっていることを認識する必要がある。

・ネガティブな意見が2～3割あるので、この意見に対してどのように対応していくのか、また、経年比較が分かる資料も合わせて検討して欲しい。

学校関係者評価委員会委員名簿

駒井　卓子　育友会会長
北村　雅世　育友会前会長
松田　卓也　蘭友会（同窓会）会長
小西 宗日出　桜井まちづくり株式会社代表取締役会長
深田　將揮　元畿央大学教育学部准教授
植村　豊　学校法人冬木学園　法人事務局長・畿央大学総務部部長
西川　隆彰　関西中央高等学校　校長

5　校長の意見書

「学ぶ力」「生きる力」を育む特色ある学習指導の取組の一つとして従来行っていた「校内合宿教育」は、合宿という形式をなくし「アクティブ・ラーニング実践教育」と名称を変え、全学年が同一日に終日かけて一斉に取り組んでいた。ところが、本年度の4月から6月中旬まで学校が臨時休業となったことに伴い、授業時間を確保するためにこの行事はとりやめとなった。元来アクティブ･ラーニングは日々の授業や行事において生徒が主体的･対話的で深い学びに接することである。そのような観点で教員が日々の授業などに臨むことが大切といえる。本年度は教員のスキルアップを更に図るため、各教科主任が中心となって授業の進め方やポイントなど話し合い研究授業を行った。また、模試のデータを基に個々の生徒の学力向上をについて話し合った。教科主任に重きを置いた取組として次年度も継続する。従って、「アクティブ・ラーニング実践教育」と銘打った一日かけて行う行事は次年度も行わない。

毎週はじめの朝のSHR(ショートホームルーム)や月一回の全校朝礼での「創設の心の唱和」、「思いやりの心・マナーアップ運動」における標語の募集と校内掲示、登下校時の校門一礼、元気な挨拶運動などの取組を通して、社会人となるための基本的生活習慣の確立や規範意識の向上を図っている。とわいえ、全ての生徒ができているわけではないので、根気よく粘り強くこの取組を続ける。本年度は新しい生徒会が「輝く道を切り開こう。己の夢をつかみとれ」という垂れ幕を作成し、新館入り口に掲示してくれた。生徒の前向きな気持ちが伝わる。

全国模試は特進コース生は全員受験している。進学コース生の受験はほとんどなかった。本年度からは進学コースにおいても偏差値がはっきり出る「進研模試」を全員受験させ、そのデータを記録するとしていたが、「進研模試」を「Vステップ」に変え3年間追跡することとした。学力向上を図るという観点では、英語と数学において習熟度別の授業を行うとともに、英語科においては「スタディサプリ」というWEB講座を授業に取り入れ、3年間活用することで生徒の学力向上を図ることを次年度も継続する。

放課後7、8限目、特進コースは「関中塾」という校内塾を特任教員で行っていたが、次年度からは「校内予備校」として進学実績のある業者に委託し、公募推薦で「産近甲龍」に合格させ、大学入学共通テストで「関関同立」にチャレンジできる力をつけさせる。進学コースは「SSP(学習支援計画)」を「知正塾」として教室で、「勉強クラブ」を「知正の杜」として図書室に自学自習の場としてのブースを設置した。なお、生徒が高校在籍3年間で「漢字」、「英語」、「数学」の検定試験を3級以上取得できることを今後もめざしたい。

行事に関しては、本年度はコロナ禍で体育祭も文化祭も実施できなかった。次年度コロナ禍が終息していれば体育祭は6月に、文化祭は8月下旬に行う予定である。
海外への修学旅行は費用面も鑑みてグアム方面で過去3回行っている。今年はコロナ禍により海外が中止となった。国を越えた高校生同士の交流は何物にも変えがたいものであり、J･Fケネディ高校とは姉妹校として今後も良好な関係を維持し交流を継続する。なお、本年度は修学旅行を沖縄久米島に変え11月中旬に実施した。コロナ禍による影響が少し和らいだときに行くことができ、全員無事に所期の目的を果たして帰れたことは、その後の新型コロナウイルス感染急拡大を鑑みるにつけ、本当にありがたいことで本校にとっては天佑神助としか言いようがない。

建学の精神である「徳をのばす、知をみがく、美をつくる」に基づく人格形成を図るとともに、生徒の第一希望の進路実現が達成できるような取組を今後も積極的に進めていきたい。